

## 後藤みな子 『高円寺へ』 に向かうために

楠 田 剛 士

### 一・特集の趣旨

本特集は第七一回原爆文学研究会（二〇二四年三月一六日）の再読企画に基づく論考と、後藤文学全体を再読するための小説事典および文献目録で構成される。再読のテキストは、後藤みな子の『高円寺へ』（深夜叢書社、二〇二一・一〇）である。本書の著者経歴にあるように、後藤は一九三六年に長崎に生まれ、兄を長崎原爆で亡くし、その死をみとった母が精神を病んだ体験をもとに小説「刻を曳く」を執筆した。「刻を曳く」が文芸賞を受賞し、芥川賞候補にもなった。その後も原爆後の家族について小説を書く、現役の作家である。

後藤作品をめぐる本会での批評としては、二〇〇五年のシンポジウムで田崎弘章が佐多稲子や林京子とともに取り上げ、二〇〇六年の機関誌五号で中野和典が「刻を曳く」について論じ、二〇一

二年の研究会で『樹滴』の合評会を行い、長野秀樹が報告したのみである。後藤みな子という作家が、長崎の原爆をめぐる書き続けてきたことは知られていても、また以前本会の会員として例会や懇親会に参加されていた関わりがあっても、論じられる機会は多くなかった。本特集は最新の単行本『高円寺へ』を手がかりに、後藤文学の再読・再評価を試みるものである。

再読には研究会員から栗山雄佑氏と筆者、会員外から岩下祥子氏の三人が登場した。栗山氏は沖繩近現代文学の研究者であり、『〈怒り〉の文学化——近現代日本文学から〈沖繩〉を考える』（春風社、二〇二三・三）の単著がある。会報六九号において目取真俊「平和通りと名付けられた街を歩いて」と後藤みな子「炭塵のふる町」の共通点として女性の狂気を指摘している。今回はそこで示唆された母の〈狂気〉の問題をジェンダーの観点から論じている。岩下氏は、尾形亀之助を中心とするモダニズム詩の研究者であり、詩集『うさぎ飼い』（石風社、二〇二〇・一一）の詩人である。久留

米大学で批評家・松原新一の指導を受け、後藤とともに「すとりんぼり」に同人として参加した。今回は「すとりんぼり」という発表媒体を踏まえて論じている。筆者については以前『西日本女性文学案内』（花書院、二〇一六・二）で後藤の経歴をまとめる機会があった。本稿では、「原爆小説」についての考え方、著作、先行評、反復するイメージについて述べ、『高円寺へ』に向かうための議論の扉を開いていきたい。

特集にあたって、これまでの後藤の著作や評価が一望でき、今後の研究の基礎となることを目指して文献目録を作成した。目録にない情報をお持ちの方はぜひご教示いただきたい。また今回の登壇者で、あらずじをまとめた小説事典を作成した。後藤は作中において、似た設定の人物を繰り返し登場させ、過去の自作にたびたび言及している。この事典が後藤の小説の特徴をとらえるうえで参考になれば幸いである。

## 二、「原爆小説」について

原爆文学研究会という場で後藤みな子を取り上げるにあたって、まず問題になるのは後藤と原爆文学の関係をどう考えるかであろう。岩下論でも栗山論でも、二〇〇六年八月発表のシンポジウム記録「〈私の浦上〉」の発言が引かれている。ここで後藤は、自分の小説を「原爆小説」と言われることを「非常に嫌」がっている。これ以前にも、一九八三年に刊行された『日本の原爆文学』に関して、「自分の鎮魂の作品。もうしばらく沈めておきたい」と作品収録を断っている（近藤ベネディクト「元編集者が残す『日本の原爆文学』

全一五巻の記録」。

しかし初めからそうだったわけではない。文芸賞受賞後の朝日新聞のインタビュー記事（一九七一・一一・一六）では、「私はこれからも長崎人の心にしみついた原爆の傷を執ように問い続けていく」と語り、「いま原爆にちなんだ第二作を百枚書いている」ことが伝えられている。「長崎の証言の会」という長崎の平和活動団体に寄せた手紙でも、「原爆後の長崎」は私の一生の仕事です。どこまでできるかわかりませんがやってみます」と述べている（「長崎の証言ニュース」一九七二・三）。全国紙のインタビューでも私信のようなものでも、自分が原爆を書くことを引き受ける意志が表明されていたのである。実際に「雲の穴」、「海鬼灯」、「風待ち島」といった、直接長崎の被爆者が登場したり長崎が舞台になったりする短篇が書かれている。

それが「風待ち島」の後、長く小説を発表しない期間に入る。八〇年代のエッセイでは、「原爆小説を書けば書くほど、原爆の持つテーマの重さにおしつぶされそうになった」（「暮しのつみ草 書くこと、生きること」「革新」一九八一・一〇）というように、原爆を書く苦しみがたびたび書かれていく。八三年の再録辞退もこの時期にあたる。二〇〇二年九月に「桐の露地」を発表してから二〇〇六年七月の「樹滴」連載まで約四年の間が空いたことも、なお書く困難に直面していたことを示す。後藤にとって「原爆小説」とは書こうとしても思うように書けないものだった。シンポジウムでの発言はこうした過程を経てのものであることに留意したい。

さらにシンポジウム後にも変化がある。「樹滴」連載中の二〇〇八年に放送された「ラジオ深夜便」では、「文学には、時空を超え

た力があると信じています。私の小説にその力があるかは疑問ですが、その力を持つように精進したい。原爆が人間の心にどれほど大きな影を落としたか、これを書かなければ死ねないと思っています」と述べている。近年の新聞記事でも、「被爆体験を語れる人はいずれいなくなるが、文学は時空を超えて訴える力がある。原爆で未来を閉ざされた人々の魂に寄り添い、生きている限りは書き続けていきたい」（『読売新聞』二〇二二・八・九）と述べる。どちらも原爆のもたらした問題を小説に結び付けて書くことを明確にしている。二〇一一年の『コレクション戦争と文学』への再録でも、「父も死に母も死」に「浦上の原爆も風化していくのではないかと恐れ」た気持ちがあったとして承諾している（『ひろば北九州』二〇一一・一一）。

後藤は原爆を文学として書くことの難しさに向き合い、その困難さを実感を込めて小説やエッセイに著してきた。それらは原爆がもたらす問題に対する「文学の力」の可能性の形象である。原爆文学を研究する場で論じるに意義は十分にあると考える。

### 三．著作

後藤は長く小説を発表しない期間があったため、一般に寡作のイメージがあると思われる。実際にどれくらい小説やエッセイを書いたのか。これまでどれくらい論じられてきたのか。それを整理したのが「後藤みな子著作・関連文献目録」である。

後藤は「刻を曳く」を最初に書いた小説だと述べている。作家としての第一作で間違いないが、諫早高校二年のとき「藤なみ江」の筆名で書いた「空色の本」がある。敬体で書かれた三ページの掌編

で、あらずじは次の通りである。「私」が中学生のとき、貸本屋で空色の表紙の本を手取る高校生の水野信吾を知る。信吾は姉のボーイフレンドだったが、「私」とも仲良くなつていく。一年ぶりに二人きりで再会するが、四日後、信吾の友人から手紙が届き、信吾が自殺したこと、「私」を愛していたこと、望まない結婚を迫られていたことを知る。「私」は衝撃を受け、死にたいと思うが勇気が出ない。どこからか信吾が発した「愛する」ということは苦しいことです」という声が聞こえてくるところで物語が終わる。性急な物語展開に未熟さはあるものの、思いがけず汽車に飛び乗り、自分でも分からないまま博多行きの特符を買う主人公の不意の行動は、作家デビュー後の作中人物にも見ることができると述べている。

単行本は小説が三冊、ノンフィクションが一冊ある。『刻を曳く』以降の七〇年代の作品（『雲の穴』『海鬼灯』『風待ち島』）は単行本に収録されていない。七七年の『風待ち島』から二〇〇二年の『霧の露地』まで四半世紀の開きがあり、『刻を曳く』から『樹滴』まで四〇年かかっていることから寡作といえる。

しかしそれは「樹滴」より前であり、以降はコンスタントに発表している。二〇〇六年から「樹滴」の連載が「すとろんぼり」で始まる。同人になつた経緯は岩下論が詳しいが、岩下が述べる後藤の「創作意欲・情熱」は、「樹滴」初回で「連作」の見出しがあつたことからよくわかる。その後の小説も連作による長篇となり、後藤の執筆スタイルが定着していく。

「すとろんぼり」はほぼ半年に一回のペースで刊行され、「樹滴」も毎号連載された。八号で完結し、九号から次作「高円寺へ」が始まる。「高円寺へ」は第四回までが「すとろんぼり」、第五回以

降は関西から出ている雑誌「イリプスⅡnd」に連載された。二〇一三年に「すとりんぼり」同人の中心だった松原新一が亡くなり、雑誌の編集や刊行が遅れたため、掲載誌を変更したことによる（松尾省三「あとがき」「イリプスⅡnd」一四号、二〇一四・一〇）。詩人の倉橋健一の橋渡しで『樹滴』が深夜叢書社から単行本化された縁もあり（松原新一「喫煙室・1」「すとりんぼり」二〇一二・一〇）、倉橋が主宰する「イリプスⅡnd」（のち「イリプスⅢrd」）が新しい発表の場になった。「高円寺へ」完結後も「川岸」「霧雨」「昼の月」とほぼ休みなく小説を発表し、執筆のモチベーションを保っている。なお「霧雨」は連作十一まで続くが、末尾に最終回を示す記載はない。十一話は、主人公が母に縁のある宿に泊まろうとした場面で終わっている。続けて宿の中の様子や宿泊後の心境が書かれてもおかしくない流れであるだけに、唐突に終わった印象は拭えない。

著作には他にノンフィクションやエッセイがある。特に『女芸人聞書』にまとめられる聞き書きの連載、「毎日新聞」「革新」でのエッセイの連載は小説を発表していない期間にあたる。小説を書きたくても書けない葛藤や苦悩が見える一方で、これまでと異なる人との出会いに手応えを感じる様子も窺える。二〇〇〇年代以降は、解説、インタビュー、対談、選評など仕事の幅が広がっていく。北九州市立文学館友の会や北九州文学協会の会長をはじめ、松原新一と「山本健吉・石橋秀野研究会」の世話人代表を務めたり、作品は発表していないが雑誌「九州作家」の編集委員を務めたりしている。このように後藤の仕事は、北九州に住み、自分だけではなく他人の文学の力も育て、広げていくことに大きな特徴がある。

関連文献には批評、解説、新聞記事等がある。全体として研究

論文は少ない。文芸賞受賞から七〇年代後半までは、原爆文学を描く新人作家として文芸誌での時評・合評で取り上げられていた。八〇年代以降、小説を発表しない時期に入ると、林京子や佐多稲子らとともに長崎原爆を描いた文学史的意義が評価されていく。ただし小説の単行本が『刻を曳く』だけのため、論じられる作品対象も限られた。二〇〇〇年代になり、後藤が同人誌を拠点として小説を発表するようになると、九州在住の松原新一、松本常彦、松下博文、長野秀樹らが積極的に新聞時評で取り上げていく。特に『樹滴』完結・刊行時には、読売新聞、西日本新聞、毎日新聞、朝日新聞の各紙で紹介が行われた。前述のように後藤には執筆以外の仕事もあるが、講演やイベントが報じられたり、談話・コメントが掲載されたりすることも増えている。そうした社会への発信も、時空を超えて訴える文学の力に関わっていることは言うまでもない。

#### 四・先行評

『高円寺へ』に関する先行評は新聞の時評が多い。一番早いものでは、長野秀樹が第一回を取り上げるが、短い紹介にとどまる（『西日本新聞』二〇一〇・一二・一）。松下博文は第一回について「作品全体に無力感と虚無感が漂っている」と述べ、食卓に置かれた「鍋」が夫婦関係のすれ違いを象徴していると見る（『毎日新聞』西部、二〇一一・三・二二）。大矢和世による取材記事は『樹滴』刊行が中心だが連載中の「高円寺へ」にも触れ、「語れなかつた「核心」に向かつて、幾度も文学の言葉を重ねる」朝子の姿を紹介する（『西日本新聞』二〇一二・八・八）。松原新一による批評は、第四回が

掲載された「すとりんぼり」一二号（二〇二二・一〇）に掲載された。松原は「朝子という女性は長くひたすら受動性の内部を生きてきたひと」と述べ、大矢和世の表現を借りながら朝子にとっての「文学」とは「深い「空白」にことばを与える苦痛に満ちた作業になるはず」だと指摘している。長野秀樹は連載完結後に、「作家が誕生する稀有な時間が、揺蕩いながら流れる時間と高円寺という空間に、描き出される」とまとめる（『西日本新聞』二〇一五・一・三〇）。松本常彦も完結に際し「高円寺へ」の執筆は、文学という危険地帯に近づく自身の姿を映し、その危険地帯を通過することなしには表現できない生の死角を映すカーブミラーを拭く試みであった」と意味づける（『読売新聞』西部、二〇一五・一一・二二）。小林孝吉は、「主人公・朝子に、後藤みな子に小説を書かせることになるのは、満たされることを求める空洞と、閉ざされるほどに解き放たれることを望む母の記憶と、そのときに知ることのできなかつた夫・隼との「愛」という、「直接描かれることのない」三つをとらえている（『原発と原爆の文学』二〇一六・三三）。

先行評では〈無力感〉〈虚無感〉〈空洞〉を抱えつつ、〈語れない部分〉〈空白〉〈死角〉に接近する朝子の生き方、あるいはそこから浮かび上がる後藤の書く意志が注目されてきた。「刻を曳く」や『樹滴』と比較されがちだが、その他の小説、エッセイも合わせて考えてみたい。

## 五. 反復するイメージ

『樹滴』完結の翌号から、早速「高円寺へ」の連載が始まっている。

後藤のエッセイ「諫早にて。」（『すとりんぼり』二〇一四・一二）によると、もともと『樹滴』連載後に松原新一から次の作品を聞かれたとき、咄嗟に「諫早」を書くと言葉にしたが、書くべきテーマが自分の中で温まっていかなかったため、代わりに「高円寺へ」を書くことになった、と述べている。そのとき書けなかった「諫早」は、「高円寺へ」の後の小説「川岸」において、諫早水害の記憶（の空白）をめぐる書かれることになる。テーマが温まるまでに時間かかることは、長崎原爆二六年後に発表された「刻を曳く」や四〇年ぶりの単行本小説『樹滴』、そして東京時代から大きく時間を隔てた『高円寺へ』にもあてはまるだろう。

ただし高円寺が『高円寺へ』で初めて描かれたわけではない。文芸賞受賞時の作者紹介欄には、後藤の高円寺の住所が番地・アパート名まで記されていた。これは後藤が希望したわけではないだろうが、以後、後藤の著作には高円寺が何度も登場する。小説では「雲の穴」「風待ち島」「桐の露地」「樹滴」でアパートの様子が描かれる。八〇年代のエッセイでは、高円寺のアパートに住んでいたことはもちろん、作家の未亡人で酒場を開いているN夫人と親しくしていたことが頻繁に話題に挙がる（『暮しのつみ草 ある夫婦の話』『革新』一九八一・七、「美しい話」「かくしん」一九八二・一一など）。エッセイで書かれた高円寺という場所や酒場に集う人々の様子を『高円寺へ』のそれとで比較すると、約三〇年の開きがあるにも関わらず、記述の重なりが多く見られる。他方、エッセイでは作家Nとインシャルだったものが、『高円寺へ』では坂田先生と具体的な人物名が与えられていることなどの違いも見られる。

後藤の小説における高円寺表象で注目したいのは、高円寺が時

間や空間を超える幻視の場所になることである。たとえば「雲の穴」では、不倫相手の男性と高円寺の住宅街の公園で初めて出会うが、公園に咲いていた紫陽花は、幼少時代に暮らした長崎の風景や父の背中への記憶に結び付けられている。「桐の露地」は、〈霧の露地〉の物語でもあり、アパートの露地にある桐が霧のような幻に覆われる感覚を抱く。『樹滴』では、高円寺の露地で男と別れたとき、そこに大きな桐の木があったことを思い出し、全く異なるはずの浦上の樹木を連想している。

全く異なる場所、もの、人との結び付きは『高円寺へ』では、霧、朧、靄、幻のイメージとして表れる。以下いくつか例を示す。

- ・その夜、見る間に霧は海も山も島も覆い隠した。全てが霧の中で見えなくなった。深い霧を朝子はいつまでも茫茫と眺めた。(二五・二六頁)
- ・「その夜のことは、別れる時も、ずっと思い出さなくて、先日、佐方先生のお宅へお邪魔した帰り、空の朧月を見上げた時、不意に思い出したのです。この空はいつか見たことがある。違ったのです。自分が見た月ではなかったのです。それから、何もかも自信なくて、夫と別れたことも……、何故そうしたかも曖昧で」(二四五頁)
- ・朝子は川の土手を眺め続けた。靄はいつそう濃くなって川を埋め尽くしていく(略)靄が切れて、立ち現れた木は幼い朝子が見た、葉が落ちた裸木のようにも見えた。そして、その細い木は母自身にも思えた。(二六一・二六二頁)
- ・朝子が今から向かおうとしている文学が、一瞬の幻のように、光芒の飛沫となって消え去つてもいい、あの母を書いておきたいとおもった。(二四四・二四五頁)

不確かではつきりしないからこそ、浦上や原爆や死者といった、い

まこの自分から遠く隔たったものとながる可能性がある。幻視の場所を描くことは、「文学は時空を超えて訴える力がある」と語る後藤の文学的実践としてとらえたい。

その他、『高円寺へ』と後藤の他作品との関連に触れておく。先ほど述べた幻視のイメージは、『高円寺へ』以降も、「川岸」における川霧と父母の姿、「霧雨」における霧雨と母の記憶などで反復される。『高円寺へ』のあとがきには、東京から移り住んだ小倉が原爆投下予定地であることを知らなかったことが書かれているが、同様の内容が、すでにエッセイ「雲の穴」(『毎日新聞』一九八〇・一・三一)に見られ、小説としては「霧雨」の大きなモチーフとなつていく。

炭鉱町についても「炭塵がふる町」以来の後藤の関心事である。エッセイ「二つの石」(『文學界』一九七三・五)のなかで、筑豊の炭鉱町であるK町(鞍手町)にU氏夫妻(上野英信・晴子)と一緒に訪れたときのこと書かれている。ノンフィクションの『女芸人間書』では自分のことはほとんど語らずにインタビュする側に徹するが、丘輝美の回だけは、後藤自身の炭鉱町の経験が詳しく語られている。最新作の「昼の月」でも炭鉱町への天皇の巡行と母親の飛び込みが言及されている。

こうした個々の作品研究や複数を横断するテーマの分析のほか、戦後のより広い文脈からの分析も今後の課題としたい。